

(2) 課題の困難度

□チャレンジの提供

学習者にとって最適な困難度の課題を提供することも大切である(Ames,1992)。われわれは成功すること、あるいは失敗することが明白な課題に対してやる気が起きにくい。例えば、プロレスラーや幼児と真剣勝負で腕相撲しようとは思わないだろう。勝敗が分かりきっていて面白くないからだ。過度に困難な課題に直面すると「できる」という自信(自己効力: 2章3-3)が低下してあきらめてしまうだろうし、逆にすぐ成功するような容易な課題であってもやる気が削がれるのである。達成動機づけ理論(4章4-2)によれば、自尊心(self-esteem)が脅威にさらされているような自我関与(2章2-3)の状態でない限り、成功するか失敗するかわからないような目標(達成できる見込みが50%程度の目標)を提供するチャレンジングな課題(challenging task)が学習意欲を高めさせるとされている。

* 学習意欲の理論 動機づけの教育心理学 鹿毛雅治著 金子書房